
魔法少女リリカルなのはS t r i k e r S バトスピと魔法の物語

ネガティブ妄想者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers バトスピと魔法の物語

【NZコード】

N8447S

【作者名】

ネガティブ妄想者

【あらすじ】

バトスピが大好きな二人の主人公、赤城空と白波大地。二人は自分の切り札から頼み事をされる。それはなのはの世界に散らばった？レアを集める事。スピリット化をする？レアに対抗するため、青年達はスピリットに変身する。その力を持ち、どうなのはの世界で生きるのか・・・ 「行くぜ！アタックステップ！」魔法少女リリカルなのはStrikersカードの力を使いし者・・・

- 始まります！

ほぼ会話文のみや文が主人公の啖きばかりと表現のみの駄文です。

それでも良い人は読んでみてください。
さい。あとタイトル変えました。

あと文に文句があればくだ

プロローグステップ＝始まる物語（前書き）

「こんにちはー、ネガティブ妄想者です！
駄文ですが今度こそやり通します！」

では、行きましょうー！プロローグステップ！

プロローグステップ＝始まる物語

「行くぜ！アタックステップ！ジークフリードでアタック！」

俺の名前は赤城空あかぎそら

バトスピ大好きな高校三年生だ。

「甘い！オーディーンでブロツク！」

こいつの名前は白波大地しらなみだいち

俺と同じバトスピ大好きな親友だ。

「フラッシュショタインミング！オフェンシブオーラ！」

「お見通しなんだよ！ディフェンシブオーラ！」

二人はマジックカードを使う。

「燃やせ！俺のジークフリード！」

「撃墜せよ！僕のジークフリード！」

二人が叫び合い、一枚のカードがぶつかり合つ。その時・・・

(ピカアアア)

「ジークフリード！？」

「オーデイーン！？」

一枚のカードが光出す。

ぬわ！？

そ
寧
!!
・
・
・
」

人はそのまま光に引き込まれ、意識が途切れた……

?

●・・目覚め・・・

声かして目を覚ます。

目を開けて、周りを見ると白い場所たゞた
声をした方を向くとそこには・・・

『目覚めたか・・・』

『こちらも田を覚ましたようです』

龍皇ジークフリードと要塞皇オーディーンがいた。

『済まないが呼びださせてもらつた、実はやつてもらいたい事が・・

「喋った！？喋ったよ！？空！」

いつの間にか隣にいた大地が慌てている。

「お、落ちつけ！そ、素数だ！素数を数えるんだ！」

空も慌てながら大地に素数を数えると言つ。

「わかった！1・2・3・4・・・・」

「いやー普通に数えちゃつてるからー。」

『（ブチツ！） いい加減にしろーーーー。』

（「ンツー）

「「痛つ」」

慌てて話を聞かない一人にジークフリードは拳骨を喰らわせる。

『まあまあ、フリーード、一人とも落ちついたよひですよ』

「誰でも拳骨されたら黙るわー。」

『もう一発逝つとくか？』

「すいませんでしたー。」

切れて叫び散らす中にジーラードが拳を見せ、黙りさせる。

『よしーなー話をしよう!』

『俺は空の切り札、ジークフリードだ』

『私は大地様の切り札、オーディーンです』

一體が名乗る。

「それは良いけど」には?」

『(ヒ)は私達? レアが生きる世界です』

「なんでこんな所に呼びだした?」

空が聞く。

『あなた達は私達が? レアである事はわかりますね?』

「「うん」」

二人が頷く。

『その? レアが何者かによつて七枚、ある世界に飛んで行つてしま

つたのだ』

『あなた達にはそれを集めて欲しいのです』

「「はい？」」

カードを集めると言葉に拍子抜けする。

「カードを集める？」

「そんな簡単な事を？」

『いや、集めるのは集めるんだが・・・』

『その世界ではカードがスピリット化してしまつんです』

「一体が一ヵ一ヵ笑いながら喋る。

「つて一ヵ一ヵしてゐる場合じゃねえだろ！」

「なんだよー？カードがスピリット化する世界つてー？」

「一ヵ一ヵ笑う一體に一人が突っ込む。

『とりあえず・・・その世界でスピリットが暴れたら大変だから集めて欲しい訳です』

「いやいやいやーだからカードがスピリット化する世界つて何だよー？」

『リリカルなのはの世界だ・・』

ジークフリードがさも当然の事のよつて言つ。

「・・・・・ああ～～～・・」

行く世界を聞いて納得する一人。

「確かになのはの世界ならありえなくないかも・・・」

「うん、なんでも有りだもんね・・」

『氣合と根性でなんとかなるアニメだもんな WWW』

『・・ひどい言い草ですね、フリード・・・』

「でもなんでも有りアニメだからと言つて俺らまでそいつは無理だ
デバイスも無いし・・・」

『大丈夫です、空様。私達もデバイスとして協力します』

オーディーンがすごい事を言つ。

「「「マジでー?」」

『マジです ついで言つとセットアップ時、私達の姿になります』

「「「マジでー!ー?」」

『もういいわー!ー!』

さうに驚く一人にジークフリードが突つ込む。

『あと大公、デスペラード、タイタス、ヴァリエルの四体にも変身
できる』

「「マジか『いい加減にしろ?』はいーすみませんー。」

『つたぐ・・・次はこの四体の内、一體選べ』

『私達は元から決まります。

空様はフリード、大地様が私ですね』

一人の目の前に緑・紫・青・黄色の四枚のカードが現れる。

「うーん・・・どれにしよう・・・
大地はどれにする?」

「僕は紫と黄のカードになつてみたいな
ほら、僕つて緑や青つてキャラじゃないだろ?」

いや、どんなキャラだよ!

「なら俺が緑、青で、大地が紫、黄色を選ぶ」

その言葉に反応するかのように四枚のカードが一人の手に渡る。

『・・・なんだろう・・・話がポンポン進んで行つて逆に不安になる・
・』

「勝手に呼びだしといで何を言つ

『それもそうですね・・・

それでは次はデバイスと私達のカードを差し上げましょ!』

そう言いながらオーディーンが光出す。

『さつさとやるぞ!』

ジークフリードも光出す。

光はそのまま一人の人差し指に触れ、いつの間にか指に指輪が嵌めこまれていた。

「おお〜、デバイスっぽい!」

『デバイスだよ!』

『あとカードとカードケースを渡しましょう』

さらに目の前から赤いカードケースと白いカードケース、さらにジークフリードのカード、オーディーンのカードが現れ、六枚のカードとカードケースが一人の手に渡る。

『それとこのデバイスには規制があります』

「「規制?」」

『はい、変身する時はスピリットの名前を叫んでセットアップしないといけません』

「このことの記述の？」

大地が聞く。

『はい、その方がわかりやすいですから・・・』

「・・・誰に対しても？」

『もちろん読さよ』『さあ、次の説明だ』『それもそうですね』

オーディーンのメタ発言をジークフリードが思いつきり伏せる。

『俺らの変身は一枚に対して一日に一回だけだ』

「うわ～不便だな～」

『一日中植物状態になりたいならどうぞ』

「気をつけて使わせていただきます！」

オーディーンが文句を言つ空に脅しをかけ、空は卑屈に態度を変える。

『説明はこれくらいですね。あとはカートリッジが無いくらいです』

「え～無いの～？」

『スピリットにカートリッジがあるわけないだろ・・・』

「それもそうだな・・・」

空は納得して頷く。

『それでは行きますか』』

オーディーンがみんなに語りかける。

「なら行こう」

『レッツゴー』

白い世界が光る。

二人はカードの入ったケースを腰に掛ける。

「あれ? ところで・・・」

空が何か気になりジークフリードに聞く。

「俺らは元の世界に戻れるんだよなあ?」

『すまん。 戻れん。』

「えつ?」

そのまま呆ける二人と一機を光が包んだ・・・

?

光が消えると二人は森の中にいた。

「あれ、 ここどうじ?」

『ここは・・・・・どこだ?』

「「知らんのかい! ! ! 」」

『知るわけねえだろ! 原作あまり知らねえよー。』

「知らねえのかよ! 森の中つて言つたら電車の時かホテルの時位だろ! 」

『だから知らねえってんだろ! ! 』

空とジークフリードが言い合つ。

(ドカンッ!)

上から音がする。

空と大地が気になり上を見る。

上を見ると桃色の砲撃が放たれていた。

「・・・なあ・・あれってなのはのディバインバスター? 」

「・・・だよね？・・・」

(ガサツ)

さらに前から音がする

そっちを見るとガジェットが三機くらいいた。

「・・・・・あの・・・いきなり戦闘？」

(キュイイイイン)

ガジェットが何か撃とつとする。

『戦闘する気満々ですね』

「「氣楽に解説してんじやねえええ！――つてあぶなつー。」

ガジェットの攻撃を一人はギリギリかわす。

「仕方ねえ、戦うか！」

『ならカードスキャナー展開つて叫べ』

「セットアップじゃないの？」

『それは変身する時だ。まずは準備だ』

ジークフリードが説明していなかつた部分を話す。

「お願いだから説明はちゃんとして？」

『いいから叫べ。死ぬぞ』

「何言って……うおっ……」

さらに攻撃をかわす。

「空ー言つしかないよー！」

「仕方ない、」

「「カードスキヤナー展開！」」

二人が叫ぶと指輪が光り、腕にデバイスみたいのが巻きついていた。

「えっと……これがデバイス?」

『そりだが何か?』

「「どうからどう見てもデバイスだろおおおお……」」

『ピンチなのに突っ込みできるあなた達はす』』ですね……』

『いいからさつさとカードをスキャンしろ!六あるから六!』

「くっ、・・・もつなるようになりやがれ!……」

空が自棄になり、叫ぶ。

「行くぞ！　大地！　！」

「何か納得できないうけど・・・行くよー」

二人は腰にあるケースに手をかけ、カードを引く。
そのままデバイスにセットする。

「スキャン！　カードセット！　ジークフリー、セットアップ！」

「スキャン！　カードセット！　オーディーン、セットアップ！」

『『セットアップ！』』

カードが光を放ち、空達を包む。
光が晴れると・・・

「うおおおー、ジークフリーになつてる！」

「これがオーディーンの体・・・」

空と大地はジークフリーとオーディーンの姿になつていた。

「これで戦える！　行くぜ！　雑魚共！」

「空・・・そんなに調子に乗らない方が・・・」

大地の話も聞かず、空はガジェットに殴つた。
ガジェットは無残に潰れた。

「これがジークフリーの力・・・燃えてきた！　！」

『そりだらう！行くぞ！俺らの力を見せてやるやー』

「まかせとけ！」

「先が思いやられる・・・」

『私もそう思います・・・』

なんだかんだで空達の初戦闘が始まった・・・

プロローグステップ＝始まる物語（後書き）

主人公がジークフリードになつたりオーディーンになつたりしたら
面白そうですね～。
だから書いてみました。
表現へタですが頑張ります。
では、次で会いましょう。

ネタバレステップ2 設定（前書き）

作者「主人公達の設定だー！」

空「かなり不安だ・・・」

作者「だいじょぶ！かなりマジで書いたから！デッキ作りながら！」

大地「本気で不安だ！」

作者「うるさい人は放つといて、主人公、デバイス設定です」

ネタバレスステップ〃設定

主人公設定1

名前：赤城空あかぎそら

性別：男

性格：何にでも真っ直ぐに行動する熱血タイプ。

困っている人を見るとすぐに駆けつけるほどのお人好し。
デッキも熱血な為、赤のデッキ。

好きな物・事：バトスピ 赤色 龍皇ジークフリード 辛いカレー
歌（バトスピ関係）

嫌いな物・事・悪い事 悪い人 人を見捨てる人

容姿：髪は黒髪 顔は中の上（顔イメージはれい×ばとのあつき
ー）

魔力値：ジークフリードのおかげでAAAランク

魔力光：使うカードにより変わる。

（ジークフリードなら赤、大公なら緑、タイタスなら青）

備考：小さい頃に特撮ヒーローものを見過ぎて、熱血に生きるようになる。

大地とは小学生の時に会い、意気投合して親友に。

中学時代に変な二つ名を持つ（かなり厨二くさい）

高校生になり、バトスピを大地に誘われやる事になる。
そしてある人と赤のデッキに出会い、バトスピが生きがいになつた。

歌は時々歌う程度。泣いてる子を見ると速攻で歌う。
リリカルなのはの知識はあるが細かいところでは覚えていない

デバイス設定1

名前：ジークフリード

A.I：男

デバイス：インテリジェントデバイス

待機状態：赤い宝石が嵌つてている指輪

形状：カードスキャナー【赤色】（形はテマーズのデバイスだがスラッシュさせず、

カードを差し込み使用する）

性格：短気でよく空に切れるが、サポートや助言する優しさもある。

備考：空の切り札のスピリット。空を呼び出したスピリットの一体。オーディーンとは仲が良いが、喧嘩もする。

バトスピでいつも大地に負ける空に不満を持っている。

変身するスピリット設定1

龍皇ジークフリード・赤の?レアカード。能力は炎を体の一部や全身に纏わせる能力。

翼はあるが魔力で飛べるので必要はあまり無い。

い。

必殺技：『ジーク・ブレイク』 右腕に魔力を込め、敵を殴りつけ魔力を爆発させる技

『ジーク・ストライク』 炎を全身に纏わせ、敵に激突する技

『龍皇紅蓮竜牙』 ???

キングタウロス大公：緑の?レアカード。能力は全感覚を最大限にアップさせる能力。

狭い場所で戦う事を得意とする。六本足で歩き難しそうだが滑るように歩く。

(アメンボーグみたいな感じで)

必殺技：『大公一閃』 獣槍ゲイボルグに魔力を込め、敵を切りつける。

切れ味は殺傷設定のレヴァンティンと同等。

『大公の剣』 つるぎ 獣槍ゲイボルグを大剣化させ、敵に切りつける。

英雄巨人タイタス・青の?レアカード。能力は敵の魔法を粉碎する能力。

能力は強いが魔力の消費が半端なく高い。瞬間

移動が可能。

接近戦を得意としていて、遠距離攻撃をする敵にも瞬間移動で距離を詰めれる。

必殺技：『タイタス・ナックル』 拳に魔力を込め、敵を殴りつける。

Bは不可） 魔力を相殺する事も可。（S）

『タイタス・リボルバー』 拳に全魔力を込めて敵を殴り吹き飛ばす技

すぐ戦闘不能になる諸刃の剣な技。

全魔力を込めるので、使うと

主人公設定2

名前：白波大地

性別：男

性格：物事を冷静に判断する冷静タイプ

何かが起きると冷静に判断し行動する。でも突っ込みだけは思いつきり弾ける。

勝負事も好きで勝つのが普通と言つほど。負ける時もしばしば。

デッキは冷静に判断ができる白デッキを使う。

好きな物・事・バトスピ 要塞皇オーディーン バトル あめ玉

勝負事

嫌いな物・事・負ける事 人が死ぬシーン 偉そうな人

容姿・髪は茶髪 顔は中の上(イメージはこれゾ の歩)

魔力値：オーディーンのおかげでAAA

魔力光・空と同じで、カードによつて色が決まる

(オーディーンなら白、デスペラードなら紫、ヴァリエル
なら黄)

備考：小さい頃に父親に勝つて褒められて勝負事が好きになる。

空とは小学生の時に会い、意気投合して親友に。

高校生でバトスピに出会い、空を誘つた。

空には何やら恩があるらしいが・・・

リリカルなのはの知識は空と同じくらい。

デバイス設定2

名前：オーディーン

AI：男

デバイス：インテリジェントデバイス

待機状態：白い宝石が嵌つて いる指輪

形：カードスキナー【白色】（ジークフリードと同じ形）

性格：いつも冷静で大地に尽そつとするが、無茶をするとひどく怒る面もある。

備考：大地の切り札のスピリット。空達を呼び出したスピリットの一体。

ジークフリードの事をフリードと呼ぶほど仲がいい。
勝負事が好きな大地の事を心配している。

変身するスピリット設定2

要塞皇オーディーン・白の？レアのカード。能力は防護魔法強化。

能力は自分にも他人にも使える。

しかし他人に使う場合は近くにいなければならぬ。

必殺技：『フルバースト・ショット』 全銃口から魔力弾を放つ。

『フルバーストブレイカー』 全銃口から集束型砲撃魔法
を放つ。

い諸刃の剣の技。

魔界七将デスペラード・紫の？レアのカード。能力は力の吸收。

敵の魔力・原動力を吸い取り、自分の物にする事が可能

他人に渡すのも可能。

必殺技：『悪魔の一閃』 剣を持ち、相手を切りつける。

切りつけられた敵は魔力消費が通常の一倍になる。

倍になる。

大天使ヴァリエル・黄の？レアのカード。能力は魔力全回復。

魔導師の魔力一人分を全回復させる事が可能。しかし、自分自身は不可。

能力は便利だが戦闘はできない。常にサポート側

必殺技：『フルリカバリー・マジック』 光を放ち、味方全員の魔力を回復させる技。

一ト魔法としては最強。

攻撃魔法ではないがサポート

カードスキャナー設定

形：デジンティーズのデバイスの形だがスラッシュする所が差し込み口になっている。

さらに腕に巻かれている状態（腕時計みたいなのを想像したらわかりやすいかも・・・）

色・空が赤色、大地が白色

効果：登録された？レアをセットし、カードの名前を叫ぶ事でそのスピリットになれる。

しかし同じカードでの変身は一回のみで、

もし変身してしまつと一日植物状態になつてしまつ。
(間違つて変身しても一回にカウントされる。)

カートリッジ・無し（スピリットに変身するため必要無し）

セットアップ時：それぞれのスピリットの姿。

大きさは普通の人よりちょっと大きい程度。

? レアカード設定（ネタバレ上等の人だけ見ていいですよ?）

龍皇ジークフリード

要塞皇オーディーン

キングタウロス大公

魔界七将デスペラード

英雄巨人タイタス

大天使ヴァリエル

暴双龍ディラノス

巨神機トール

蛮騎士ハ キュリー

魔界七将デストロード

機動要塞キヤツスル・ゴレム

大天使ミカファール

魔龍帝ジークフリード

? ? ?

? ? ?

? ? ?

? ? ?

? ? ?

ネタバレステップ2 設定（後書き）

空「……変な一つ知って？」

作者「禁則事項です……」

大地「僕……冷静タイプ？」

作者「建前上は……」

二人「駄目じやん！」

作者「細けえこたいいんだよ！」

空「あと？ レアの“？？？”って何だ？」

作者「秘密です。バレたら楽しくない。

・・・まあ、魔龍帝でわかる人もいるっしょ WWW

空「黙作者のくせに何を言う」

作者「止める！ 感じるだろ！」

二人「変態だ！！！」

作者「つるさい！」

空「あとさ……何か……」

作者「ん? どつたの?」

空「弱点多くない? あとかなり単純なよつな・・・」

作者「タイタスとオーディーンだけでしょ?
タイタスはヴァリエルと組みや良い。
単純なのは勘弁してくれ」

大地「僕の方は必殺技少くないか?」

しかもヴァリエルがバトルできな「・・・」

作者「書いてこれで十分じゃね? と思つたんだ
あと黄色のカードってサポートイメージあるから・・・」

大地「なんだろ・・・わかつてしまつ自分が怖い・・・」

空「でも諸刃の剣は無いだろ・・・植物状態も・・・」

作者「チートじゃない主人公イメージはデメリットが豊富なイメージ
なのさ!!--」

二人「そんなイメージは燃やして死んで!!--」

作者「「スルーしよ・・・」皆さん? これで設定はわかりましたね?
では1話で会いましょう」

二人「「無視してんじゃねええ!!--」」

ファーストステップ＝なのは達との対面・機動六課に協力！？（前書き）

作者「なんか文がテケトーな気がする・・・」

空「駄文作者なんだから仕方ないんじゃ？」

大地「そうだよ？駄文作者」

作者「そんなに駄文言つなよ～（泣）」

空「駄文だから仕方ね～よ。諦めろ」

作者「うう～（泣）駄文ですけど読んでくれると嬉しいです・・・」

空＆大地「「では第1話始まります」」

「ファーストステップ」なのは達との対面・機動六課に協力！？

「オラアアア！」

「とりやつーーー！」

（ドガーンッ！…）

空と大地がガジェットに一発入れ、爆発させる。

「あれ？もう終わり？軽いね～ WWW」

「あんまり油断しない方がいいよ、空」

『大地様の言う通りです。油断しないでください』

『ほんの一體倒して何調子に乗つてんだ、恥を知れー』

大地と『デバイス』機が空を攻めた。

「・・・すいませんでした・・（シクシク）」

「少し周りを見た方がいいかも・・・」

「ならちょっと飛ぶか・・・」

「いや・・・飛べるの？」

『飛ぶ事なんて簡単ですよ？一人に魔力を渡しておきました』

「ちなみにどこのくらい?」

空がオーティーンに聞く。

《二人共AAAですね。》

「「？」」

あまりの多さに驚く一人。

《だから空を飛ぶなんて簡単なのだ。さつさと飛べ》

「・・・なんかジークフリードが偉そう・・・」

「大丈夫・・・良い事くらいあるよ・・・多分」

話をしながら大地は飛ぶイメージをする。

「あ、ちょっと浮いた・・・」

「ずつ~ずる~よ~。俺だつて・・・」

《空は翼があるから楽だろ・・早く飛べ、さあ飛べ》

ジークフリードが空を急かす。

「つむさ~なあ・・・行くぜー。」

(バサバサツ)

空が翼をはばたかせ・・・飛んだ。

「ひめ～、飛んだ～」

空は飛べた事に喜んでいろと・・・

《つー～空ー》

「なんだよ。ジークフロード？」

《強い魔力反応がこっちに来てるー逃げるぞー》

「強い魔力反応？・・・いいねえ、強い奴・・・戦つぜー。」

《いや待て！魔力の正体はあのチート女だぞー！？》

「チート女？・・・誰？」

「なのはの事じゃないかな？」

なんとかコツを掴んで飛んできた大地が言つた。

「何ー～あの白い魔界（シロウ）のわつ」

白い魔界と言おうとした空の頭を桃色の何かがかかつた。

「・・・今のティバインショーター？」

『そのようです。大地様』

「えっと・・・俺危なかつた?」

『口を滑らせるな・・・死ぬぞ?』

「以後『氣』をつけます・・・」

空達が会話していると・・・

「時空管理局です。武装を解除して投降してください」

声がして、空達は振り返る。

そこに・・・

「投降しない場合は実力行使で取り押さえます」

そこに時空管理局の“エース・オブ・エース”

高町なのはがいた。

「なのははside」

空達がガジェットを倒している時、なのはは次元震が起きたポイントに到着していた。

「はやてちゃん、この辺りなの?」

『やのせすなんやけど・せんまに何もないん?』

「うん。 ガジンシトが数体出でたから倒したんだけど・・・」

『ガジンシトー・』

はやてがモニター越しで驚く。

「うん。 でもほんのちよつとだから楽だつたよ。」

『なら大丈夫やな・・・』

なのはがはやてと話してると森の中から赤い竜が飛んでいた。

「えつー・はやてやん・あれつて・・・」

『待つてーなのはちやん落ちつくんや。』

召喚魔法を使つた形跡が無いから、幻覚かも知れへん』

『なひかよつと調査してみるよ』

『気をつかひな?なのはちやん』

「任せへ」

そつ言つてなのはは通信を切る。

なのはは竜に近づくと今度はロボットのような物が浮いて来た。

「(変なの、召喚魔法が使われた形跡が無いのに竜やロボットが出でぐるなんて・・・)」

なのはがそう思つてゐると・・・

「何ー?あの白い悪魔(シコウ)のわつ!?」

なのははいつの間にかディバインショーターを放つていた。

「(なんかイリツとしたの・・・でも声を出してたから人なのかな?)」

そう思いながら竜とロボットに近づき・・・

「時空管理局です。武装を解除して投降してください。
投降しない場合は実力で取り押さえます」

「なのは shade end」

「空&大地 shade」

なのはに宣言された時、一人は固まつた。

なぜなら・・・

「(え、ちょ、マジ?実力で取り押さえ?
つか何で竜の姿なのに入つてわかつた!?)」

「(落ちつけ。落ちつくんだ僕!戦わないですむ手があるはず・・・

」

二人共、なのはの「実力で取り押さえる」という言葉にビビッていた。

二人がビビっていると・・・

『すまねえな、白の魔導師よ』

ジークフリードが急に喋りだした。

『俺らは怪しい者じやねえ、ただ目的があつて行動しているだけだ。嘘だと思うならお前らの所に連れてつて徹底的に調べてもいい』

「「「えつー?」」」

ジークフリードのいきなりの提案に三人が驚く。

「ちょっと待てジークフリードー何で!」

『その方が得策だと踏んだんだ・・・文句あつか』

「得策つて言つたつて・・・」

『大地様、フリードはカードを集めるため
なのは様に付いて行くのが得策だと踏んだのでしょうか』

オーディーンの説明で二人は納得する。

「え、えつと、では機動六課に来てもらえますか?
そこでお話を聞かせてもらいます」

「お話」という単語に二人はビクつく。

「どうしました？」

「「い、いえ、なんでもないです（なぜだ。）何でこんなに怖いんだー。」

二人は何でビクついたのか自分でわかつていなかつた。

「でも、行かれよつか」

はい「」

ジークフリードの提案のおかげでなのはどバトルをせず事なきを得た。

「（）」までスマートに進むとは……面白いですね……）』

オリティーンはそれを思しながら空達と機動六課に向かって

[空&大地 Since 1970]

「機動六課フォワードメンバー Side」

「 なのはさん大丈夫かなあ？」

「ただの調査だから大丈夫に決まってるでしょ」

今、機動六課のフォードメンバーは訓練場で

訓練（なのはがいないので自主練だか）していた。

「でも次元震があつたみたいですし何かあるんじやないでしょうか」

「」「怖い事言わないでよエリオ君～」

「でも何かあつてもなのはさんがなんとかしてくれるよ」

スバルが微笑みながり言ひ。

「そうね。なのはさんなら竜が出ても使い魔にして連れてきそうだ
もの」

「それは言ひすぎだよミティア～」

フォアードメンバーがこんな会話をしてみると・・・

「みんな～」

「なのはさ・・・ん～？」

なのはが訓練場に戻つてきた。

・・・一体の竜とロボットを連れて・・
フォワードメンバーは当然の「ごとく・・・

「ええっ！？ティ、ティアーなのはさん本当に竜連れてきたよー？」

「冗談で言つたのに・・・本当に連れてくるなんて・・・」

「かつ、かつ」

「そんな事言つてゐる場合ぢやないよ～」

「慌てていた。（約一名は見惚れているが）

「あの・・なのはさん、みんな慌てるよ／＼・・・

「えつと、その姿だからじやないかな？」

「あ～、なるほど～」

二人が人の姿になるまでこの騒ぎは続いた。

「機動六課フォワードメンバ－ side end」

騒ぎは収まり、今、空と大地は部隊長室の中にいた。中には空と大地、なのは、フェイト、はやて、がいた。

「ほな、名前を聞いてもええか？」

「は、はい！俺の名前は赤城空、高校生です」

「僕は白波大地。同じく高校生だ」

『俺はジークフリードだ』

『私はオーディーンでござります。以後お見知りおきを』

「うちは機動六課部隊長の八神はやて、うちはが・・・」

「機動六課スターズ分隊隊長、高町なのはです」

「私は機動六課ライティング分隊隊長、ファイト・テスター・ラオウンです」

「それで、何でみんなとこもったんや?」

『うひ紹介が済むとはやてが本題を聞く。

『それは俺達の転送ミスだ。本當はカードが出現する場所に転送するはずだつたんだが・・・』

「カードって?」

「これの事だ」

空がなのは達に持つているカードを見せる。

「うひきの竜?それにこれは虫?うちはは・・・人?」

「うひちこもある」

「うちはロボット、あと悪魔と天使?」

『その六枚の他にあと七枚を急いで集めないとならない』

「でも、カードだけやつたら急がなくてええんとちやうひへ」

ジークフリードの言葉にはやてが疑問に思い、聞く。

『空と大地には話したが、カード達は実体化するんだ』

「…………ええ！？」

部隊長室にいた全員が驚く。

『そのために俺らは空達にそのカードの姿になつてもいい、
実体化したカードを倒し、回収してもらおうと思ったのだが……』

「行き先を間違えた……といつ詰みたいです」

『行く所も無いのが仇になつた……』

「そうなんか……」

ジークフリードと空の言葉を聞いて
はやてが俯き、そして……

「…………で働かへん？」

顔を上げると同時に変な事を口走つた。

「…………はい？」

一人も驚いて変な声を出す。

『確かにここにいればカードが集まるかもしねない・・・』

ジークフリードも変な事を口走らせる。

「あの、迷惑ですよそんなの」

「別にええよ。ただ・・・」

『協力してくれれば・・・でしょうか?』

はやてとオーディーンが怪しく笑う。

「わかつとるやないか~ w。で、協力してくれへん?」

「(確かに、機動六課はレリックつて物を集めてるんだつけ?
ならカードもそこに出現するかもしれないな・・・)」

「わかりました。協力させてください」

大地がそう考へていると空が喋りだした。

「何も聞いてへんけどええの?」

「大丈夫、行く所が無くて困つてたんだ
それにカードを集めるのも楽になりそうだ」

「空の言つ通りだ。どうせジークフリードは生活の事まで考えてな
かつたらうし」

『ぐつー何も言い返せない・・・』

ジークフリードが悔しそうに呟く。

「なら決まりやな。ほんなりこれからよろしくな」

「はーーよろしくです。高町さん、ハラオウンさん、八神さん」
空と大地が微笑みながら返事をする。
すると

(トントン)

空が肩を叩かれる。

叩かれた方を見ると・・・

「えっと、模擬戦しない? ちょっとこのカードと戦つてみたくて・・・」

フュイトが目をキラキラさせて大公のカードに指さしながら言った。
いや、ちょっと待て・・・これ・・・死んだ?

『大丈夫だ。修行だと思えば・・・』

「こんな怖い修行はいらなによ・・・。」

「それじゃあ行こう!」

こんな状況でなければうれしい台詞なのだが・・・
と思いながら空はフュイトに引きずられて逝った。

「・・・えっと、もしかしなくても・・・」

状況を判断しようと大地ははやぐに聞く。

「わざわざ・・・フロイドちゃんはバトルマークなんや・・・」

「・・・南無三・・・」

大地はフロイドに連れて行かれた空に敬礼した。

「言つてる事とやつてる事違つからへーー!」

引きづられながら突つ込む空に关心しながらその姿を見届けた。

《じとな風に事が進むとは・・・まあ、いいか・・》

オーティーンは誰にも聞こえないように呑んでいた。

ファーストステップ＝なのは達との対面・機動六課に協力！？（後書き）

空「おい・・・」

作者「何かな？ワトソン君？」

空「誰がワトソンか！なんだよこの展開は！
何で俺がフェイトとバトル？大地で良いじゃねえか！」

大地「いや僕に振るなよ！」

作者「いや、大公は模擬戦で元々出すつもりだつたし、
それともタイタス使つてなのはと模擬戦が良かつた？」

空「恐ろしい事言つな！勝てるか！」

作者「つ～事で次回は空vsフェイトですwww
勝てるわきやねえ～www」

空「く～では次回で会いましょう

セカンドステップ＝模擬戦？・ジークフリードのお願い（前書き）

作者「呼び方を決めました！」

空「何だいきなり・・・」

作者「いやね？いちいちジークフリードの姿の空とか
オーディーンの姿の大地とかメンドイから
呼び方を決めてみました！」

大地「まあ、その方が楽そうだね」

作者「呼び方はこのようになります！」

龍皇ジークフリードの空＝G空

キングタウロス大公の空＝T空

英雄巨人タイタスの空＝E空

要塞皇オー＝ティーンの大地＝O大地

魔界七将デスペラードの大地＝D大地

大天使ヴァリエルの大地＝V大地

作者「こんな感じですぜ！」

空「呼びやすいか？」

大地「テキトーさが満開だなあ」

作者「黙らつしゃい！では呼び方も決まつたし、」

空＆大地「「第一」話始まります」「」

作者「セカンドステップつて言つてよ～（泣）

セカンドステップ＝模擬戦？・ジークフリードのお願い

〔空 side〕

どうもこんにちわ、最近「俺って不幸？」とか思い始めた
赤城空です！

（ヒュン）

空の頬を何かかすめる。

何がかすめたんだろう？

それは・・・

「ハラオウンさんのフォトンランサーだよーこんちきしょーーー！」

キングタウロス大公の姿で思いつ切り空は叫ぶ。

『おいおい・・・そんな事で大丈夫か？』

「大丈夫じゃねえ！大問題だ！ーーー！」

ジークフリードがネタを出し、空もそれに答える。

「もう一回行くよー！」

そして戦うのが楽しそうなハラオウンさん・・・

確か戦闘狂バトルマニアって言われてたっけか・・・

『大公の姿して飛べんだから頑張れよ!』

「確かに大公の姿でも飛べるけど、早いんだよ! 攻撃が! ハラオウンさん自身が!」

空もなのはの知識はある。

しかしうる覚えであるため、攻撃パターンなど覚えてるはずもない。だから模擬戦開始時のフェイドのスピードに追いつけずボロクソやられているのである。

・・・わりかよ! ! !

『だつたら大公の能力を使え!』

「能力! ? んなものあるのか! ?」

『説明面倒だから教えてなかつたwww』

ジークフリードが陽気に笑いながら言つ。

「お願ひだからこれ終わつたら全部話して・・・お願ひだから・・・

あまりにもデバイスの仕打ちが酷い為、大公の姿で空が泣きだす。大公の姿で泣かれ、ジークフリードは・・・

『お、俺が悪かった、だから大公の姿で泣くの止めてくれ・・・』

思いつきり謝つていた。

『大公の能力はすべての感覚を最大限にまであげる『超感覚だ』』

「ネーミングがありきたりだな・・・」

『だ・ま・れ・さ・つ・た・と・や・ら・ん・と・や・ら・れ・る・ぞ』』

「仕方ない！ ハラオウンさん！！」

いきなり名前を呼ばれ、フェイトはびっくりする。

でも今はそんなのお構いなしだ！

「見せてやる！ これが俺のギャラクシーステップだ！」

〔空 side end〕

〔大地 side〕

「どうも、最近「僕つて冷静キャラ？」とか思いだした
白波大地だ・・・

「ハラオウンさんー見せてやる！ これが俺のギャラクシーステップ
だ！」

なんかいきなり相方がほざきだした・・・

「あの～・・・あのセコツつって・・・」

なのはが苦笑いで大地に聞く。

だよな～、なんか勝つてやるぜー的な台詞はいてるもんなあ・・・
・・・わしきつ～か最初からやられまくつてる奴が・・

「気にしないでください。あいつは勝てるとわかるとあんな事を言うんです」

「それって空くんが勝つって事?」

「いや・・・100%負けます。もつ奇跡と言つてこいほど・・・」

「や、そつか・・・」

「それはええ事きいたなあ」

いきなり八神が出てきた。

どこから湧いてきたこの狸・・・

「今、失礼な事考へんかった?」

「・・・別に～」

心読んだ!？・・・八神はやて恐るべし!～!

「まあええけど・・・ちよつと賭けせえへんか?」

「賭け？」

「やうや、もし空くんが負けたら女子寮に住んでもいいでー

「……はい？」

僕は八神さんのことなりの提案に変な声を漏らす。

「……事は空が勝つたら女子寮に住めるって訳か……

「やうやう事やー！」

八神さんが胸を張つてこたえる。

「ちなみに拒否権は？」

「無いで」

「クソつ、空は負けが決定されてるから女子寮行き決定じゃねえー
かー！」

「まつはつは

八神が腰に手を当てて笑つている。

無性にむかつく・・・頼む！勝つてくれー空ー

【大地 side end】

〔空 side〕

「行くぜ！大公！『超感覚』！」

T空が叫び、緑色の魔法陣が現れる。
それと同時にT空の感覚が上がる。

「これが超感覚・・・これならいける！」

感覚が上がった事により、
フェイトの姿を感覚だけで確認できるようになり・・・

（ガキイイイン）

「なつ！？」

「よし！防いだ！」

「これなら勝てる！」

横から攻撃してきたフェイトの一撃を獣槍ガイボルグで防ぐ。

空がそう確信する。

でも・・・

「すごいね、でも次で決めるよ！
バルディッシュユーカートリッジ！」

『イエス・サー』

(ガシュン)

「あ、あれ？」

「プライズマ・・・

「あるえーーー！あれってヤバくない！？ビックリしようージークフロー
ドー！」

《受け入しかねえだろ・・・・空・・・》

「なんだよーーー？」

《シヨツク死するなよ・・・》

「へ？」

「スマッシュヤーーーーーーーー

ドゴオオオオオンーーーーーーーー

「ぐほおおおおおおーーーーーーーー

ト空を強烈な痛みが襲う。

くつ、そうか・・・・大公の能力で感覚が上がったから・・・・

「痛覚も上がるって事か・・・・つ、使えねえ・・・

変身が解け、そのまま空は意識を手放し倒れた。

〔空 side〕

「大地 side」

「負けてもうたなあ～」

ハ神さんが笑いながら話しかけてくる。

嘘だと呟つてくれよバー イ・・・

「ほな、女子寮で住んでもらうからな WWW」

《面白い展開になりましたね～、大地様》

「まつたく面白い・・・・・」

「あ、あはは・・・」

高町さんは苦笑いしないで・・・悲しくなるから・・
とりあえず、空が起きたら顔面に蹴り入れてやる!

〔大地 side end〕

「ジークフリード side】

ああ～、倒れちまた…
まあショック死してないし良しとするかww

「えっと…・・大丈夫かな？」

ハラオウンが空に駆け寄ってきた。

『ああ、ダイジョブダイジョブ 気絶してるだけだ』

「そりなんだ…・・そんなに強くやつた覚えないんだけど…・・

あれでまだまだだと…? 意外と強い攻撃だと思つたんだが…それ
ほど強いてことか
ならこいつらに頼んでみるか…

『なあ、ハラオウン…・・』

「何かな?」

『頼みがある…』

「頼み?」

『ああ、空達を鍛えて欲しい』

「え…・つと、何で?」

そんなの決まってる

『「こいつらが弱いからだ、本来なら勝てなくとも
もつと戦えたが……すぐ負けた……』

「…………」

『だから鍛えて欲しい』の世界であいつらが実体化する前に……』

「…………だつて、はやて」

『別にええよ?』

いきなり田の前にモニターが現れた！

・・・びっくりした

『「ひつかせひうちで面白いもんが決まつたしな～』

「『? ? ? ?』」

面白いモノ？

ハラオウンもわからないのか首を傾げる
すると・・

『実はな？空君と大地君の部屋割りを
空君が勝つか負けるかで賭けてたんよ～』

「『はい？』」

俺とハラオウンは変な声を出す。

『どうゆう事?』

『空達が負けたら女子寮に、勝つたら男子寮に住まわせられて内容やー。』

つまりここは楽しんでたつて事でいいか・・・

『それで空が負けたから女子寮行かとこう事か・・・』

『やつやつ事やー。』

思いつき爽やかな笑顔でハ神が答えた
・・・空にこの顔を見せてみたいね~

「つまり空達は女子寮に住むの?」

『やつやつちなみに大地君は諦めモードやで』

まあ、部隊長が決めた事なら仕方ないんじゃね?
・・・とかで諦めたんだろうな

『とつあえず空を運んでくれないか?』『だと風邪をひくだらうか

『ら』

「ふふつ、優しいんだね」

『か、勘違いするな。カードを集めるために風邪なんぞひかれたら面倒なだけだ』

「はいはい」

小さく笑いながら、ハラオウンは空を運ぶ。

《・・・ハラオウン》

「何?」

《空達をよみじく頼む》

「うん・・任せて
なのね」も言つておくな

頼もしいな・・・

・・早く空達に強くなつてもらわんと困るな・・・

〔ジークフリード・ヒルデベルト〕

セカンドステップ＝模擬戦？・ジークフリードのお願い（後書き）

大地「おいこら作者・・・」

作者「な、何かなあ・・・そんな怖い顔してえ、
かつこいい顔が大無しよ」

大地「なんで女子寮に住まにやならんのだ！――！」

作者「だつて面白そうだつたんだもん！」

大地「・・・オー『ティーンセットアップ！』

作者「やつべ！〇大地になりやがつた！
では皆さん一次回で会いましょう！生きてたら――」

大地「フルバースト・ショット！――！」

（ドゴオオオン）

作者「ぐはあああ――！」

カードステップ＝機動六課に仲間入り・空の不幸は続く？（前書き）

空「何このタイトル……」

作者「空の未来」

空「ふざけんなあ……」

作者「うるせえなあ」、『テッキ作りの邪魔すんなよ』

空「小説を書けやー……」

作者「ルナティックはいつすれば役立つから……」

空「無視すんなーー！」

作者「ではこんな感じで二話が始まるよー」

空「ガン無視か【ラ】ーー！」

サードステップ＝機動六課に仲間入り・空の不幸は続く？

「空 side」

目が覚めたら知らない天井があつた
少しオレンジ色っぽいから夕方かなあ？
あれ？ 確か俺はハラオウンさんと模擬戦してて・・・

「田え覚ましたか、この野郎」

声が聞こえ、周りを見渡すと大地がいた
・・・・何か怒ってる？

「さあ、田覚めた所で・・・」

(ゴンッ！)

「ぐふあつ！」

「俺の顔面パンチをくれてやる」

大地が思いつきり殴ってきた・・・痛え～

「何しやがる！痛えじやねえか！」

「つるむさいーお前のせいだ女子寮で暮らす事になつちまつたから殴つたんだろうが！」

・・・は？

「えっと・・・もつかい言つて？」

「何回でも言つてやるーお前が負けたせいで女子寮で暮らすことになつたんだよー！」

ますます訳がわからない！？

訳を聞くと八神さんが賭けに誘つてきて、僕が負けたら女子寮に僕が勝つたら男子寮に住むといつ事だつたらしい

うん、これは・・・

「賭けに乗つた大地が悪いんじゃねえか！？」

「つるさいー拒否権あつたら拒否つてたわ！！」

「強制拒否すればいいだろ！？いつも宿題それで逃げてんじゃん！」

「今回は仕方ねえだろ！僕らは元の世界に戻れない、八神さんに働くいかとの誘いが来た後でそんなんできるか！」

知るかんなもん！？

『ちょっと失礼します』

オーディーンが割りこんできた

邪魔しないでくれ！こいつとは徹底的に話しないと！

『大地様、空様に伝えなければならない事があつたはずですよ』

「そうだった……」

他にも何かあるらしい
災厄な話しなら聞かないぞ』

「実は明日から機動六課で働く事になった」

ああ～それか……それなら俺も聞いてたからそんなに驚かない

「フォワードとして」

・・・・・は?

「え、えつと・・・マジ?」

「マジだ・・・お前がスタートーズ。僕がライティングだとよ
あと部屋は高町さん達の向かいらしい」

「じめん、整理させて」

え～っとまずは・・・俺らは機動六課で働く それはフォワードと
して
うん、こには問題無い。次が・・・

“ 部屋が高町さん達の向かい ”

「訳分からんわ――――」

「うわっ！」

大地達が驚く。

つか俺が驚いとるわ！何！？撃墜されて寝てる間にこんなに話が進んで驚かない奴なんているか！

しかも仕事の話からいきなり部屋の話とか順序わきまえろやーーー！

『そんなに興奮するな』

二十九

「まあ、そんなに元気なら行けるんじゃなしだ？」

はあはあ…行ぐでござ?

何かハ神さんかかなり詳しく話を聞きたいんだ」てさ

なら俺もジークフリードから詳しく聞かないと・・・
また能力説明に不備があつても困るし

『そこで他の奴にも自己紹介だとよ
・・・説明は苦手なんだよなあ
・

「何言つてんだ。あ、そうだ

空、ここでは僕らは次元漂流者として扱われるらしい」

「次元漂流者？」

『つまりは世界規模の迷子さん・・という事ですよ』

「おお、オーティーン説明ありがとつ

「まあ、八神さんがいろいろやつてくれるよつだから大丈夫だが・・

「

「だが？」

「お礼も込めて、ちゃんと手伝わないとなあ。
僕らを住まわせてくれてるんだし」

・・・ははつ、大地は本当に律儀だよなあ
それが良い所なんだけど・・

「フォワード達ともう話したし」

・・・へ?

「いや〜、シャマルさんつてすげー美人だしwww

・・・・はえ!?

「大地!お前、俺が寝てる時マジ何してた!」

「機動六課の中を案内してもらつて、フォワード達と会つて話して
た」

「うらやましい!…」(まだハラオウンさんとバトルしかして
ないぞ!)

それなのにもうみんなと話しかけるつて・・・

「IJKの薄情者ー。」

《気絶していたお前が悪い》

確かにそうだけどあれは大公の『超感覚』のせいで・・・

《耐えられないお前が悪い》

・・・〇一二

「ふざけてなじでんねんが行くべや

「わかつたよ・・・はあー」

今なら言つてもこ ciò よね?

「・・・不幸だ・・・・・」

「お~い、暗いぞお~

今俺らは船長室に向かってるんだが・・・

「「つかれこよ、確か」「ひだつたよね？・・・」

《「ちかうで合つてこます》

「ありがとう、オーディーン」

暗い廊下を歩いていた

俺はまだ機動六課の中なんて歩いてないから大地に任せせるしかない
はあ～・・・バトスピが恋しいね～

「とりあえず、能力の事とかいろいろ教えろよ、
また大公のよつねデメリットがあつても困る」

《わかつたよ、でも大公は使つよつよつちや、かなり強いぞ》

「俺がつまく使えてないと言いたいのか？」

《イエス》

そんねはつさり言わんでも・・・。

「じゃれ合ひは後にじて、着いたよ」

「おお、着いたか

・・・・・今思つたら俺部隊長室に一回行つたじやん

《フロイトにブツ飛ばされて記憶が吹つ飛んだか？》

「そんなん訳ねえよ・・・今ハラオウンさんを名前で言つた？

『名前で読んで良いと言わされたからな』

・・・・マジで氣絶してた事に後悔した

「いいから早く入るよ・・・」

俺とジークフリードの会話に呆れて
大地が部隊長室に入る。

「うわっ、ちょっと待てよ~」

そう言いながら俺も部隊長室に入る
すると部屋の中には

高町さん、ハラオウンさん、八神さん達の他に
ピンクのポニー、赤毛のちびっこ、青髪ショート、オレンジツインテ
赤毛の少年、ピンクの髪のちびっこ、白いちびっこい童、
白い小人、青犬、金髪ショートの人気がいた

「ほな、自己紹介やな、まずはこっちから・・・」

「シグナムだ」

「ヴィータだ・・・」

「リインフォース?です。よろしくです

「スバル・ナカジマ」一等陸士です

「ティアナ・ランスター」一等陸士です

「エリオ・モンティアルニ等陸士であります」

「キャロ・ル・ルシエニ等陸士であります、この子はフリードです」

「くきゅる~」

「ザフイーラだ」

「シャマルです」

一通り向こう側の自己紹介が終わる。
つかフォワードメンバー達よ・・・
階級言われてもわからんわ!

次はこっちか・・・

「(大地先に行つて)」

「(わかつたよ・・・)」

大地が咳払いし、口を開く。

「僕の名前は白波大地だ。明日からライティング分隊でお世話になります

よろしくお願ひします

《私はオーディーンと申します。大地様同様よろしくお願ひします》

大地とオーディーンの自己紹介が終わる

礼儀正しいなあ

「次は俺だな。俺の名前は赤城空だ。スターズ分隊に入る事になりました
よろしく」

『俺の名はジークフリードだ、よろしくだ』

「お手柔らかにお願いします、八神さん」

「ほなお互いの血口紹介も終わつたし、いろいろ聞かせてもらひついで
」

八神さんの眼が怪しく光る
何を聞く気だ！？

「え？」

「え？」

「え？・・・って仲間になつたんやから別にええやん」

仲間・・・良い響きだなあ・・

とりあえず名前呼びを許してもらつたからいいか

「みんなもええよな？」

八神さん・・・もといはやでが言つとみんな頷いた

「それならよろしく、はやて」

「うん、OKや、それじゃ詳しく聞こつか」

とりあえず何の質問するのか教えて~

「とりあえず空君達の目的はもうみんなには話してあるから二人のデバイスの事でも聞こつか思つとるんよ」

ああ~それを説明しないと・・

確かカードのスピリットに変身するとしか言つてないもんね

「実は俺らもそんなにわかつてないんだ」

「わかつてない?でも私と模擬戦した時、うまく使ってたような・・

「

あれをうまく使ってただと!~思いつきりやられまくつてたう!~

「うまく使えてたのは能力使つてたからだ」

『ほんの少しだけな、フエイトとの模擬戦で使用したのは

『超感覚』って言って、すべての感覚をアップさせる能力だ』

「能力?」

なのはが首を傾げ、聞いてくる

『そこを説明しなきや駄目か・・・オーディーン、バス』

『はいはい、わかりました』

面倒になつたのかジークフリードがオーディーンにバスする
・・・本当にめんどくさがりだなあ

『能力というのはそれぞれスピリットが持つ力です
例えば、空様が大公の姿でフェイト様の攻撃を受け止めたのを
覚えてますか?』

「うん、覚えてるけど・・・（そんな名前だつたんだ・・・）」

『あの時はさつきも言つた通り、大公の能力である『超感覚』。
この能力ですべての感覚を最大限まで上げる事ができます
だからフェイト様の攻撃は聴覚で動く音を追つて防いだのです』

それを聞いて、みんなが「おお！」と呟く。

『しかしスピリットの能力にはすべて欠点があります』

「欠点？」

はやてが聞いてくる。

つか、マジか！ジークフリードにも欠点あんのか！？

『大公で例えますと、感覚をすべて最大限まで上げるので
痛覚も上がります。空様が倒れたのもこれが原因です』

「なるほど」

あれは酷かった・・・全身を槍で貫かれたらこんな感じじゃね?
とか思ったもん

「他にはどんな欠点があるの?」

『他には・・・』

そこからジークフリードの欠点、タイタスの欠点、
オーディーンの欠点、デスペラードの欠点、ヴァリエルの欠点を説
明した

『まあ後は一日に同じスピリットに変身しなければ問題ありません』

「変身したら何があるん?」

『ええ、一日中植物状態になります』

「「「「-?」」」

俺と大地以外、全員驚く

まあ、一回変身しただけでそれなら酷いよなあ・・・
なのは達から言つたらセットアップが一日三回しかできねえもん

「結構なリスクやなあ・・・」

「まあ、能力も良いし、必要な時だけ変身すれば良いし
そんな苦でもないよ」

大地がさらつと答える

あの〜・・・お前がかなりヤバいよ?

ヴァリールの欠点で戦闘できるスポットは一體だけだし・・

「あ、あの～・・・」

赤毛の少年・・・もといエリオが手を上げる

「どうした、エリオ」

俺は聞いてみる。

「あの・・それってゲームで使う物なんですか?」

「!?

「なんでわかつた!?」

エリオの肩を俺はガシツッと掴む

「え、えっと、カードに何か書いていたので・・・

「・・・・・・・

それだけか・・・もと何かを感じたとか言って欲しかった・・

「・・・・・・・

・・・えっと、ピンクのポーチもといシグナムがこっちを見てるよ
うな・・

(ガシツ!)

「模擬戦をしないか?」

「やっぱ来たーーー何ーー?」の人も戦闘狂!?

「ちょっと待つて!?ねえ!誰かヘルプ!」

「「「「」・・「めんなさい」」」」

「裏切られました!?

「か無理ーー!」エイトにやられた後だからキツイ!
なら・・・・

「大地代わつて!」

「だが断るーーー!」

・・・まさかの親友にまで裏切られますた￥(^ 0 ^)／

その後、シグナムに無理やり連れて行かれ、タイタスになつたけど
5秒でピチュツた・・・

俺はこの言葉がデフォルトになりそつだが・・・

「・・・・不幸だ・・・・

カードステップ＝機動六課に仲間入り・空の不幸は続く？（後書き）

空「何か言つ事は？」

作者「・・・正直突拍子すぎたと反省してる」

空「それで？」

作者「大丈夫ー。こつからはズカズカ進まないからー。」

空「そつちかい！もうちょっと慎重に書けつて言つてんの」

作者「分かったよー、もうちょっと落ちついて書くよ。・・・」

空「よしー。ならいいな」

作者「つー訳でこんな感じの反省でした」

次回は四話で会いましょうつー

番外編ステップ＝空 vs エリオ・バトスピでバトル！！（前書き）

大地「何でいきなりバトスピでバトル？」

作者「前回、空がバトスピ恋しいって言ったから」

大地「それだけ？」

作者「実際はなのは達がバトスピしたらどうなるかな、みたいな
？」

大地「さらにここで変なキャラ出すんでしょ？」

作者「うん、ギャラクシー渡辺さんみたいなキャラ欲しかったから」

大地「名前出して良いの！？」

作者「苦情来たら直すアルよ
では番外編が始まるよ～」

大地「まったくこの作者は・・・」

番外編ステップ＝空 vs エリオ・バトスピでバトル！！

「空 side」

「ぐはあああ！疲れたー！！」

俺はベッドに思いつきりダイブする

今日はマジいろいろあつた・・・

異世界に呼ばれたり、なのはの世界に来ちゃつたり、
フェイトと模擬戦したり、自己紹介したり、
スピリットのデメリット聞いたり、シグナムと模擬戦したり・・・

・・・俺、模擬戦ばつかじやね？

「！」が女子寮の部屋じやなかつたらもつと楽になれたのに・・・

大地がソファーに座りながら愚痴る
いや、賭けに乗つたのはお前だからな？

「うるさい、お前が勝てばよかつたんだ」

なんて自己中心的！？

「大地はあれか！？ガイ・アスラ」v4をB戻勝負で倒せとか言つ
のか！？」

「いや、無理だから！呪撃デッキならなんとかなるかも・・・」

「だったら言うなよ！？フェイトの相手かなりきつかつたんだから

！」

「それはそれ、これはこれ」

お前は俺のおかんか！？

(「ンンンン」)

俺と大地が口喧嘩しているとドアがなる
たくつ、誰だよ・・・

「はいはーい、今行きます」

大地がドアに向かい、ドアを開ける
そこに・・・

「あ、夜遅くすいません大地さん」

・・・エリオだつた

エリオか・・・何か用か？

「どうした、エリオ？僕らに用か？」

「はい、さつきのカードの話を聞きたくて・・・」

・・・ワオッ！エリオが興味を持つとは！？

「良かつたら教えて欲しいなあと・・・」

「良いよ 中に入つて」

大地が「うわうわ」とした声を出しながら答える
「うわッキモッ！」

「失礼します」

「エリオ……」

「はい、何ですか？ 空さん」

「……敬語落ちつかねえ」

何かむずむずする……はやてもこんな感じだったのかな～

「エリオ……俺らは仲間じゃねえか、
だから俺と大地を呼び捨てで呼べ。敬語もいらねえ」

「えつ、でも……」

「いいからー俺らがむずむずする。だから……な？」

「それもやうだね、僕からもお願ひだ」

「……わかったよ、空、よろしく」

俺らは気分良く頷いた。

よしーこれで本当の意味で仲良くなれたな！

「それじゃ説明するよっ！」

「はい」

敬語に戻りやがつた！・・・ま、いつか・・

「こ」のカードは『バトルスピリッツ』略して『バトスピ』って言つ
カードゲームだ

遊び方は四十枚以上のデッキを組んでバトルするだけ
勝利条件は相手のライフをゼロにするか、デッキをゼロにするか
だね」

「ライフ？」

「えつと、ライフって言つのは自分の体力と思えばいいかな」

「それがゼロになると負けなんですね」

「そりゃ、エリオは覚えがいいね」

「ありがとう、大地」

良い感じにちよつと碎けてきたな・・・

次はカードの説明をしようか

「次はカードの説明だ。

カードには今、六色のカードと4種類のカードがある。

一つ目は『スピリット』、俺らがみんなに見せたカードだな。
このカードは主にアタックして相手のライフを減らしたり、
ブロックしてライフを守つたりするんだ」

「他にもあるんですか？」

「そつだ。二つ目は『マジック』、主にスピリットのサポートや、相手を不利にするカードだ。」

「次は『ネクサス』と言つて、自分の場を有利にするカードだよ」「いろいろあるんですね~」

「次は結構最近に出たカード、『ブレイブ』・・・」

「『ブレイブ』?」

「『』のカードは、スピリットと合体してパワーアップするカードなんだ」

「へえ~」

便利だけどブレイブキラーつづカード出でたからメンドクなつたんだよなあ

『なんだお前ら、バトスピしたいのか?』

エリオに他にもいろいろ説明している時、ジークフリードが話しかけてきた。

いや、やりたいのは山々なんだが・・・

「カードがないだろ・・・」

『あるぞ、作られたデッキだが・・・』

・・・・・ はあ？

今こいつなんつった？

「あるの？」

大地がジークフリードに聞く

『あるぞ、変身には使えないが・・・』

「あるんかい！？！」

ジークフリードの返答に思いつせり詫び
マジか！？でせんのか！バトスピ！

「やれりづかー今すぐやつらづかー！」

「・・・・・・・・」

俺が興奮してると大地は顎に手を当てて何か考えていた

「Hリオ、やつてみる？」

「え、・・・はい！」

大地の言葉にエリオは間を開けてから元氣よく答えた
ふむ・・相手はエリオになるのか・・・

「大丈夫、僕もアドバイスするから」

「わかりました」

ええ～、一対一？

まあ、仕方ない。エリオは初心者だし・・・

『ならデッキを出すぜ』

そう言いながら、ジーフリードが光る。
そして目の前に黒いテーブルとテーブルの上に八つのデッキ
あと・・・

「ハロ～ ジークフリード！バトルするなら解説も必要だ！
という事で参上！ギャラクシーイイイ・・・スター！！！」

金髪でグラサンを掛けて派手な服の奴がいた・・・

「誰？ギャラクシーフ？」

「いやそこは渡辺だろ」

「誰ですか？」

『アクションはおかしいが・・・
まあ、解説役みたいなもんだ』

「え～解説役・・・いらねえ・・・

「ああ！バトスピの戦士よ！デッキを取れ！

そして勝利を掴め！スピリットが君を待つていてる！

そして地味にウザ～・・・

「まあ、やれるんだしやるか・・・」「

「・・・」のデッキで戦おう、エリオ」

「デッキに関しては任せせるよ」

・・・何か大地とエリオが仲良さぬ～・・・
俺も仲良くなりて～のに・・・

「俺はこのデッキかな・・・」

俺は置かれてたデッキの中を見て、決めた。
残ったデッキはスターが回収した・・・

良し・・・

「バトルだ！エリオ！」

「はい！」

〔空 side end〕

〔解説ギャラクシースター side〕

「ああ！始まった！空 vs エリオ！勝つのは誰だ！

ちなみにコアに關してはジークフリードとオーディーンが

ボイド役だ！

あと俺のsideだがほほ会話文だぜー！」

「そこー！メタ発言してんじゃねー！」

「空からの突っ込みが来た所で、バトル開始ー！」

「先行は俺がもうう、ドローー！」

・・・俺は暴かれた墓石を配置してターンHンド

「僕のターン、ドローー。」

「（Hリオ、空のテッキは紫がメイン・・・
つまりコアをはずすのが目的のテッキだ。ここは慎重に行こう）

「（わかった。）僕はイグア・バギーをレバードで召喚。ターンHン
ドー！」

「（アタックは無しか・・・）俺のターン、ドロー
闇の聖剣をレバードで配置。ターンHンド

「おー一つとここで闇の聖剣！

空のテッキはまさかのブレイブキラー『テッキだー！』

「（）こつマジハゼー（）

「僕のターン、ドローー」

「Hリオ、ここはノーザンベアードを出して、バギーでアタックだ！」

「わかつた、ノーザンベアードを召喚、イグア・バギーでアタック！」

「ライフで受けろ！」

（パキン）

「ここでエリオが動いた！空の残りライフは4、エリオは5
どうする！空！」

「俺のターン、ドロー、
イビル・フィッシュヤーを召喚、召喚時効果によりテッキの上から
一枚オープn、
その中から一枚を手札に加え、もう一枚は破棄する。
・・・そして冥闘士バラムを召喚して、ターンエンド」

「（呪撃か・・・厄介なスピリット出しやがって・・・）
エリオ、呪撃はブロックしたスピリットを破壊する効果だ
気をつける」

「うん、僕のターン、ドロー、
イグア・バギーをもう一体出してターンエンド」

「（何か待つてんのか？）俺のターン、ドロー、
冥勇士デスカラビアを召喚、デスカラビアにイビルを合体して
ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー、イグア・バギー一体を「▼1にダウン、
マジック、リバイブドローを使用、一枚ドロー、

ターンエンド

「ドロー、（そろそろ動くか・・・）

冥騎士アンドラーを召喚、アンドラーでアタック、アタック時効果「アガ」が一個以下しか置かれていないスピリットを破壊する。ノーザンベアードを破壊する。

「しまつた！」

「おお～っと、ここでノーザンベアードが破壊された～
しかしアンドラーのアタックが残っている。どうするヒリオ～
！」

「ライフで受けます！」

（パキン）

「これでお互いのライフは4、どうするヒリオ～！」

「僕のターン、ドロー、僕はブレイドラーをLV3で召喚、
さらにマジック、ブレイブドローを使用、一枚ドローして
デッキの上から三枚オープン、その中にブレイブがあれば手札に
加える

ボーンローダーを手札に加えて残ったカードを好きな順番で戻して
ターンエンドです」

「（良いカードが来たけど、空も何か持つてるかもしねー・・・）」

「ドロー、イビルを召喚、効果使って、一枚オープン、
一枚手札、後は破棄、

さらに「ブロンズメイデン召喚、効果で一枚ドロー、
アンドレーでアタック、バギーを破壊」

「アタックはライフで受けます！」

（パキーン）

「エリオのライフは残り3！大人気ない空の攻撃が止まらない。
酷い奴だ！空！」

「なんだと！この野郎！」

「エリオ、こにはアポロを出して、バラムを破壊しよう」

「うん、僕のターン、ドロー、ブレイドラをもう一体召喚。
レバ3のブレイドラをレバ1にダウンさせ・・・」

「（来るかー？）」

「太陽よ、炎を纏いて龍となれ、
太陽龍ジーク・アポロドラゴンをレバ2で召喚！
アポロドラゴンでバラムに指定アタック！」

「（今思つたけど、エリオキャラ変わつてない！？）

（ドカーン）

「おおつとアポロの効果でバラムが破壊されてしまったー。
しかし・・・」

「暴かれた墓石の効果で一枚ドローする。」

「くつ、ターンハンド・・・」

「ドロー、ヘッジボルグを召喚、さらにアンドラーに合体。^{プレイブ}アンドラーをレバにアップさせ、アンドラーでアタックプレイドラを破壊」

「イグア・バギーでブロック！」

「空の猛攻！一気にエリオのスピリットを一體を破壊した！
「れをどう返す、空！」

「僕のターン、ドロー」

「大丈夫、エリオには勝てるカードがある。
そのカードでブツ飛ばしてやれ！」

「うん！僕は突機竜アーケランサーを召喚！
召喚時効果により、一枚ドローし、相手のネクサスを破壊する！
闇の聖剣を破壊！」

「何！？」

「効果説明！アーケランサーは召喚した時、デッキから一枚ドローでき、
さらに相手のネクサスを破壊する効果を持つ
まさに、プレイブキラー対策のプレイブだ！」

「くそつ、闇の聖剣が！」

「さらにレイニーロードルを召喚！アーケランサーをアポロに合体！^{プレイブ}

さらにアポロドラゴンをレバ3にアップ！

行け！アポロでテスカラビアに指定アタック！

アタック時効果！BP9000以下のスピリットを破壊！

アンドラーを破壊！

「マジか！？」

（ドカンバガーン！）

「おお！！エリオ、ここに来て空のスピリットを一体破壊！
やり返した！」

「くそつ、効果で破壊された分だけドロー」

「ターンハンドです」

「エリオ、油断は駄目だよ。場はこっちが有利だけどライフは
こっちが少ない、手札のマジックとかで翻弄しよう」

「うん、わかつたよ」

「俺のターン、ドロー、ちつ
ソードールを一体、ブロンズメイデンを召喚、
ターンハンドだ」

「僕のターン、ドロー・・・つー？」

「うわー、すごいカード引いたね・・・次のターンに回そつか・・・」

「うふ・・僕は光の聖剣を配置してターンエンペーン

「光の聖剣ーー！」のタイミングでーー？」

「ああーもひ空選手にはダメヤつてしか言えなくなっちゃた・・

「・

「ひぬせえー・・

「アポロニアアタック！効果でヘッジホッグにアタック！
アビリティ9000以下を破壊！イビルを破壊！」

「ノオオオーーーー！」

（アポロニア）

「スマッシュアタック！アーマーをまわるスマッシュ不調

「う・・ひぬせこ・・・

「ターンエンペーン

「俺のターン、ドロー、（これなり・・・）

俺は真剣士ベクトル召喚、効果で相手のスピリットからアマ3個
取り除く

「あ、選べ

「アポロニアアポロニアのコアを取り除くよ

「「！」」アーティファクトドリームの「→」が「→」まで下がった…。「…」するんだ…。空…。」

「セリヒアンデラーを召喚…。コアはイビルから確保

「なつ…まさか…」

「え、どうしたの？ 大地」

「空はアポロを破壊するつもりだ…。」

「その通りだ！ アンデラーの効果でアポロを破壊！
光の聖剣は「→」だと真の効果を發揮するが、今は「→」だ…。」

「しまつた！ … けど、フラッシュショータイミング…。
サジックタフレイムを使う…。」

「何…？」

「ブロンズメイデン… 一体とソードール… 一体を破壊…。」

「効果説明！ サジックタフレイムはフラッシュショータイミングに使用で
め、

め、

BP合計5000までスピリットを破壊できる。

ブロンズメイデンとソードールは共にBPが1000、

BP合計は4000、

よつて四体が破壊されたのだ…。」

「ノアアア…！ マジックの存在忘れてた！
でも暴かれた墓石の効果で四枚ドロー…。」

「アンドレーのアタックはライフで受けますー！」

(パキーン)

「ああっとーとうとうHリオのライフが2つになってしまったー！
Hリオから逆転できるのかー！」

「Hリオは耐えるか・・・ターンHンドー・・・」

「これはチャンスだー！今こそそのカードを召喚するんだー！」

「うん、僕のターンードローーー。」

「ああ、大地が言うカードとは何なのかー！」

「行きますー！」

「来いーHリオ！（つーかマジキャラ変わってないー？）

「太陽と月の化身！今こそ世界の覇者となれー！
神星皇ストライク・アポロドラゴンを召喚ー！」

「ス、ストライク・アポロドラゴンだとー？」

「うつ あああおーーー出たあああーーー！」

ストライク・アポロドラゴンーーー！

太陽龍と月光龍の合体スピリットーーー！

プレイブする色によつて効果が変わるスピリットーーー！

その効果はどんなものなのかなーーー！」

「さらに、アーケランサーを召喚、デッキから一枚ドローしてネクサスを破壊する。暴かれた墓石を破壊！」

「なつ！？俺のネクサスが！？」

「おお～～と空がフルボッコ状態だ！！！」

「これが太陽と月のブレイブデッキの力か～～～！」

「あれっ！？そんな名前だったの！？」

「さらにアーケランサーをストライク・アポロドラゴンに合体！
そしてストライク・アポロドラゴンをレバ3にアップ！」

「マジでフルボッコだ～～～！」

「ストライク・アポロドラゴンでアタック！
アタック時効果！BP10000以下のスピリットを破壊！
アンドラーを破壊する！」

「マジで！？」

「さりにストライク・アポロドラゴンはダブルシンボル！
ライフを二つ削る！」

「何！？ライフで受けれる！」

(パリンパリーーン！)

「並んだ～～～ダブルシンボルで空のライフを二つ削つて

「ライフを一気にした……どうなるゾー。」

「（こ）れはかなりの痛手……でも…）

俺のターン！ドロー！

デモボーンをLV2で召喚！さらにベルゼビートをLV2で召喚！
ベルゼの効果でトラッシュの呪撃を持つスピリットを
コストを払わず召喚！バラムを一体召喚！
ベリトもLV2でアップ！

「えつ…？」

「しまった！」

「おおっと…空の最後の大反撃…このままフルアタックか…！」

「行くぞ！ベリトでアタック！アタック時効果！
相手のスピリットのコアを一つ外す！
ブレイドラを指定！」

「ブ、ブレイドラが…」

「効果説明！冥剣士ベリトのLV2効果、
アタックする時、相手のコアを一つ外す効果を持つ。
相手のスピリットがコア一個しか乗っていない時が効果的だ！」

「でも…」

「…？」

「僕はフラッシュショタイミングでサジックタフレイムを使用!
使用コストはストライク・アポロドラゴンから確保するよ
破壊するのはバラム一体!」

「一枚もあつたのか!?」

(ドカンドカン!)

「ここでマジックカウンター一ずいじぞー!
初心者と思えない!」

「僕もびっくりだよ・・・エリオがここまで強くなるとせ・・・」

「しかし...ベリートのアタックが残つてゐるぜ!」

「ライフで受けれるよ!」

(パリーン!)

「どうどう、エリオのライフが一つになつてしまつた!
どうあるんだ!エリオ!」

「ならベルゼでアタック!」

「さらにフラッシュショーリブートコードーー
疲労状態のスピリットをすべて回復!」

「なー?」

「そして回復したストライク・アポロドラゴンでブロック!」

「ノオオオオオオ！！！」

もうターンエンドしか無いじゃんか！！」

「僕のターン、ドロー！」

「エリオ・・・俺の負けだ・・・・。
さあ！俺を撃てえええ！！！」

「ストライク・アポロドラゴンをLV3にアップ！
ストライク・アポロドラゴンでアタック！
アタック時効果でデモボーンを破壊！
これで終わりだ！」

（パリンパリーーン！）

「決ましたああ！！！空のライフをゼロにしてエリオが勝利を掴
んだ！！

勝者！！！エリオ！！！」

「ああ～、負けた～」

「楽しかったよ、ありがとう、空 」

「二人共良いバトルだったぜ！次はどんなバトルが待っているの
か！」

「では、第一回、バトスピバトル！これにて閉幕！」

合言葉は『ライトニング？NO！スター！！！』

「「やっぱ、渡辺だろ！！！」

〔解説ギヤラクシースター side end〕

〔空 side〕

いや～、強え～なあ～

あんなに強え～のは大地とあの人以来だ～・・・

「空～、ありがとう楽しかったよ

「そりやあ、何よりだ・・・

またやろづな？」

「うん～。」

エリオは汚れの無い笑顔で頷いた・・・

今はその笑顔が辛いぜ・・・

「エリオ? もう遅いから部屋に戻つて寝た方がいいよ?」

「そうだね、それじゃあおやすみ～空～大地～」

「「おやすみ～」

エリオが部屋から出て行く

「さて俺らも寝るか・・・」

『それじゃ「これ」を片付けるぞ～』

「よろしく、ジークフリード・・・」「

今思つたらあの変な奴がいつの間にか居なくなっていた・・・
まあ、いつか

「明日は訓練一日だから早く寝るぞ～」

「つよつか～い、んじゃおやすみ～」

「おやすみ・・・」

そう言いながら大地が電気を消す
明日は訓練一日、がんばる・・・

番外編ステップ＝空 vs エリオ・バトスピでバトル！！（後書き）

大地「空がぼろ負け・・・」

作者「いいじやん、結局負ける予定だつたし・・・
それに実際、書いてる時にバトスピやってるから辛いんだよ！？」

やつてみ？一人でバトスピやって書くのって辛いんだよ！？
その様子をそのまま書くの辛いんだよ！？」

大地「わかつた、わかつたから！番外編限定キャラの説明して！」

作者「むう～、わかつたよ・・・」

名前：ギャラクシースター

性別：男

備考：主に解説のみ

たまに過激に解説して
さらに空弄るのが趣味

作者「こんな感じ～www」

大地「このキャラ・・・大丈夫？」

作者「文句があつたら消すつての」

大地「そんな事する位なら最初からするな！」

作者「つゝ事で、話し文のみの番外編でした
また四話で会いましょつゝ」

大地「だから無視すんな～！！！このネタもう飽きてるつて！！！」

フォースステップ＝特に進展の無い勤務――（前書き）

作者「いやほー」

空「どうした作者、とつとう頭がバグったか？」

作者「失敬なー（^へへ）12回？レアが8枚ゲットしたから喜んでんだ！」

空「それ・・・あんまり血運にならないぞ・・・」

作者「え？マジ？」

空「コレクターなら9枚ゲットしてるだらつて、興味ない奴はそれがどうしたとか笑うだろ？ｗｗｗ」

作者「すでに笑ってんじやん！」

空「それより早く始めるー！」

作者「わかったよ・・・それではフォースステップ始まります。
あつ、／＼は念話です」

「空 side」

「はああああ！……」

スバルが俺に殴りかかる。

「おりやああああ！……」

それに合わせ、俺もタイタスの姿でスバルの拳を拳で受け止める

（ガンッ！……）

二つの拳がぶつかり火花が舞う。

いや・・火花が舞うほど威力つて……

「やるね、空！」

「お前！」そー

「はあああ！……」

スバルの拳を受け止めていると、エリオがストラーダを構えて突っ込んでくる

「つー？・・ふ！」

それをギリギリの所でバックステップでかわす。
すかさずエリオに殴りかかる・・・が

「はああああ！！！」

「なつ！？ぐふつ！」

スバルがエリオと入れ替わりで攻撃をぶちかましてきた。

くつ、スバルのパンチは結構利くなあ・・・

「空君、大丈夫〜？」

なのはが心配そうに声をかけてくる

いや、大丈夫かつて・・・模擬戦を一日連続でやらされる身になつてから言つて！？

つか、フェイト シグナム フォワードメンバーって模擬戦してかなりキツイです！

そう、今俺（大地もだが・・・）は訓練で模擬戦をさせられているなぜやらされてるかと言つと、

『同じチームなんだし、実力をわかつてた方が良いと思って・・・』

と、なのはが言つていたんだけど・・・
強いです！なのはさん！

わかつたから普通に訓練しよ！？何か模擬戦続きになりそう！？

「空！ヘルプ！」

いきなり大地から念話がくる。

念話はなのはが便利だからとか言つて模擬戦前に教えてくれた。

つか、ふざけんなコラ！

こつちだつて大変なんじやボケ！

「諦めてやられる、オーバー？」

「いや！？マジヘルプ！キヤロにバインドで縛られて、
今思いつきりティアナに思つきり狙われてんだつて！！」

「スバルとエリオが連携組んで来たん切りま～す、オーバー？」

「待て待て待て！？マジ無理！僕、模擬戦初めてだし！」

「それがどうした、黙つてやられる、オーバー？」

「畜生め！――！」

（ドカーンッ！――！）

俺の後ろから爆発音が聞こえる

・・・ええ～・・・どうやつたら爆発すんの～？

そつ思つてるとティアナ、キヤロがこつちに向かつて来ていた

うわ～、マジこれ無理！俺vsフォワードメンバージャん・・・

「たあああああ！…」

「ぐはっ…」

よそ見している俺にスバルが蹴りを入れてくる
痛つて…！蹴りも強え…な…

「良い蹴りじやねえか、スバル！」

『当然です』

マッハキャリバーが答える。

いや、お前に言つたわけじやねえよ？
蹴つたのスバルだし…

「アルケミックチーン！」

その言葉と同時に、キャロのバインドで縛られる。

くつ…動けねえ…
たくつ…

「あつがとつわこます、わわこ

いや…、じつやマズイ

「降参だ、もう手が無いっす」

つまよひじで作った白旗を振り、
俺の一言で模擬戦が終了した

「どうだつた？みんなは」

なのはが聞いてくる

「みんな強いつてしか言いよつがないです」

「・・・い、以下同文・・・ハアハア・・・」

「そつか・・・」

なのはが納得したように微笑む

「フォワードのみんなはうまくやつてこなそう？」

「　　「　　「　　「　　「」

スバル達が元気に返事をする

・・・こつらと一緒に戦うんだよなあ・・・
足引つ張らなきやいいけど・・・主に俺が・・・

「それじゃあ、朝ごはん食べに行こつか

「 「 「 「 はいー。」 」 」

みんなが一段と良い声を出す。

そりやそりや、朝早くに起きて朝飯食わず訓練してんだぜ?
かなりきついからやつてみるや

「大地君も寝てないで行くよ。」

「なの・・は、・・・・・先・・行つててくだ・・・・さい・・」

・・・そんなに疲れたの?俺はあんま疲れてないんだけど・・

『体力の差だらう?』

それもそうか・・

まあ、大地をこのまま放つておくのもなんだし・・・

「なのはとみんなは先に行つてくれ。」 いつが元気取り戻したら
行くよ

「うん、それじゃお願ひね

やつとそのままみんなは食堂に向かつて言つた

「あと何分だ?」

とりあえず朝飯食いたいので、何分で起きるか聞いてみる。

「あと5・・・」

「5分?」

「五年・・・」

「長いわ・・・」

なんつーバカだ!

「なら歌つてよ、そしたら起きる・・・」

何!？その無茶ぶり!？

「ダンでよろしく・・・」

あの・・・マジ??

「・・・仕方ねえ」

こんな所で・・・しかもこいつの為に・・・
・・・haar、鬱になるかも・・・

俺は感情を込めて歌つ。
聞く人を撫でるよ^ううに・・・
時に叩きつけるよ^ううに歌つ。

風を感じながら、朝の輝きを感じながら

・・・歌う。

心を燃やし、歌う。

「サンキュー・・・元気出たー（棒読み）」

「棒読みで返事してんじゃねえー！」

「あたたくこいつは・・・寝めるなひりさんと寝めやがれ！」

「せんと・・・飯でも食こに行へか・・・

そつまにながら飛び起きる

起きるならもひとい早く起きうよ・・・
俺はまだ六課の中を回つてないんだぞ・・・

「んじゃ、行くべー！」

「ちよ、待てー。」

「遅こー。」

「「すんませ～ん」」

食堂に着いて、同時になのはに怒られた・・・
まあ、このくらいは怖くないが・・・

「んじゃ、僕はテキトーに持つてくるから先に行つて」

「おう！」

大地が飯を取りに行き、俺はスバル達の席に行く

スバル達の席に行くとスパゲッティ？が山のように乗つていた。
・・・何これ？スパゲッティマウンテン？

「スバル・・・そんなに盛つて大丈夫か？」

「大丈夫だよ？すぐに消費するし～」

「「「つ～？」」

スバルさ～ん？ そうゆうのはあまり言わないで～
女性陣達が泣いちゃうから～

「空、お待たせ～つて・・・何このカオス・・・

「言わないであげて・・・」

女性陣 特にティアナが泣くから・・・

とりあえず大地に取つてきてもらつたフレンチトーストに手をかける

やつぱ朝はパンだよな～

「あれ？ 空と大地はそのくらいで大丈夫なの？」

スバルが俺に聞いてきた。

いや、お前と比べられても困るんだが・・・

まあ、俺らの朝飯はトースト一枚のみだから珍しいのか？

「大丈夫だよ、朝は俺も大地も軽めなんだ。

毎日夜遅くまでバトスピやって、朝はそんなに食べれなくて・・・

「

「朝はパン一枚が癖になってきたんだよ」

「そりなんだ～」

スバルは納得したらしく、またスペゲッティを食べ出した
・・・マジでどこに入るんだ？あの量・・・

「空、早く食べて、ヴァイスさんの所に行くよ」

「え？ なんで？」

「何でつて・・・訓練以外では僕らは雑用係だよ？」

? そりだっけ？

「そりなんだよ～」

「心読まれた！？」

「良いから行くぞ！」

「いや、ちょっと、待つて！俺完食してな～」

（ズルズル～）

そのまま引きずられて連行される
・・・と思つたら・・

「ちょっとストップや」

はやてが俺を引きずる大地を呼び止めた

「なんだ？はやて、僕は仕事しに行くんだが・・・」

「いやちも仕事の話や」

ん？仕事？ファースト・アラートはもう終わつてるからアグスタか？
でも早すぎのよつな・・・

「聖王教会の依頼で第97管理外世界“地球”の“海鳴市”に出張
に行くんや」

出張？アニメにそんなのあつたっけ？
しかも海鳴市だからなのは達の故郷だよね？

「へえ～行つてらっしゃい

大地が満面の笑みで言つ

「何言つとるん? 機動六課のスターズ分隊、ライティング分隊
あとシグナム達で出張やで?」

「…あれ?」

「…・・・つて事は・・?」

「空君達も来てもううで」

「…してはやては大地に負けない満面の笑顔で言い切った・・・

「「ええええーーーー!」」

「…して俺らの初任務は出張になってしまった・・・
・・・アグスタが初任務だと思つてたのに・・・onz

フォースステップ＝特に進展の無い勤務－団田（後書き）

空「え？出張？」

作者「うん、出張」

空「マジで？」

作者「アニメでしか知らないって設定だから仕方ないや」

空「俺らが来たせいのオリ展開って訳では……」

作者「んな事できるか！ちゃんとある話だから……」

空「それならいいや、気にせずやってやるよ……」

作者「……空が熱血^{バカ}って設定にしてよかつたよ……」

空「何かバカにされた気がするが……
まあ、任せとけ！」

作者「ではこの熱血^{バカ}と冷静くんを応援してくださーい……」

それでは、5話で会いましょうー！」

空「またなー」

ファイフステップ＝出張任務1（前書き）

作者「・・・・・」

大地「・・・遅くなつた言い訳を聞こうか・・・」

作者「・・・えつと、バトスピの大会に専念したり、
徹夜で武装姫バトルマーチーズを一週間くらいやつたり・・・」

「

大地「歯あ食い縛れえ！・・・」

作者「そげぶあ！・・・」

大地「たくつ！僕の出番を考えてない癖に
こんなに投稿するのを遅らすなんて・・・」

作者「ぐふつ、あ、あんまり俺を傷つけないで・・・」

大地「とりあえずさつさと始めろ！」

作者「い、イエッサー！ではファイフステップが始まります」

ファースステップ＝出張任務1

「空 side」

「・・・おえええ～」

今、俺ら機動六課の主要メンバーは聖王教会？の依頼で地球に行くため、

転送ポートとやらに向かっていた。

でも着くまでの移動手段はへりな訳で・・・

「汚いよ、空」

盛大に酔っていた・・・つかスバル、汚いって言うな！
まだ吐いてないだろ？が！

「そんなんで大丈夫なの？」

ティアナか・・・

うん 大丈夫じゃない 大問題だ？

「リインが背中を撫でてあげるです～」

・・・ああ、けつこー楽になつてきた・・・
リインさんど～もです！

「ホンマにだらしないなあ」

「うわっ、出たよ、狸」

「ちよつ、誰が狸や！」

「うむわーーお前もリインを見習えーそして酔い止め持つてたらく
れー」

「文句を言つてからお願いするがどつちかにしいや」

そう言いながら酔い止め薬を投げ渡してくれた

「アーティストの本」

これで楽になる・・・

薬を飲むと、向こうで大地とエリオとキャロが何か見ていた
何見てんだ？

「大地、何見てんだ？」

思つた事をそのまま口に出す。

— キヤ口が出張先の資料を見てたから一緒に見てるんだ

はやてから聞いたじゅん、地球の海鳴市だつて、

「……ちでは地球はどんな感じかなあ」と思って見てたんだよ」

そーですか・・・

「魔法文化無し、次元移動手段無し・・・って魔法文化無いの？」

「いつの間にかスバルとティアナが近くにいた。
つーかティアナ・・・そこを不思議がりますか・・・

「無いよ？お父さんも魔力ゼロだし・・・」

「スバルさん、お母さんになんですね」

「うん」

スバルがお母さん似・・・
スバルからちよつとだけ家族の事聞いたけどやつぱり・・・

「こんな大食らいが3人もいたらミッドの食糧全滅かもなwww」

「いつ言わすにはいられんて

「酷いよ、空手」

「あははっ、『めん』『めん』

「でも何でそんな世界からなのはさんやハ神部隊長のような
オーバースランク魔導師が・・・」

「突然変異と言つか、たまたま〜な感じかな？」

「ぬおつーはやで、いつの間に近くに来た！？」

「あ、すみませんっ」

「ええよ、別に」

「私もはやて隊長も魔法との出合つたのは偶然だしね

「へえ～」

みんながそなだあ的な声を出す。

ん?

「なりジークフリード、俺らの出会いも偶然か?」

『・・・・・禁則事項だ・・・』

・・・何?そのとあるドジっ子未来人的なノリは・・

「まあ、どうでもいつか」

「はい、リインちゃんのお洋服」

「わ～ シャマルありがとです～」

「?リインに服?

そう思つて振り返ると

・・・どう見てもサイズが合わない服を持つて喜ぶリインがいた・・・

「えつ？リインさん、その服って・・・」

「はやてちゃんの、ちっちゃんの頃のおたがりです」

「いや、やうじやなぐ（ではなく）・・・」

俺とエリオがハモった・・・

「な、何か・・普通の人の、サイズだなつて」

キヤロ・・・笑いこらえるくらいなら笑つてくれない？
あとそこの狸も笑つてんじやねえつ！

「あはつ、そういうえばフォワードのみんなには見せた事無かつたで
すね」

「「「「「「ん？」」」」」」

みんなが首を傾げる
見せた事無い？何を？

「システムスイッチ、アウトフレームフルサイズつ

（キイイイン・・パン）

「「「「「おおつ」」」」」」

リインが光に包まれて、光が晴れたら大きくなつた！？
俺も何言つてるかわからないがこれだけは言える

「大きくなつたけどちつさいなあ～」

（「ゴスツ～」）

「ノオツ！！！」

す、脛！脛蹴られた！思いつきり蹴られた！

「失礼しちゃうです！身長はだいたいエリオとキャラくくらいです」

「あ～、確かにそうだな。どっかと言つてヴィータの方が小さ～」

・

（「ゴンツ～～～」）

「ノンツ～～～」

の、脳天・・脳天にすごい衝撃が・・・

「次言つたらぶつぶす」

ヴィ、ヴィータがグラーファイゼンを構え、
かなり怖い声で俺に恐ろしい事を言つた

「す、すいません」

「よし」

こんな感じでそろそろヘリの旅はおしまいに近づいていつた

「八神部隊長そろそろ・・・」

「うん、せんならなのは隊長、フヒイト隊長、
私と副隊長たわせひよお歸るヒジリがあるから」

「うん」

「先に現地入りしてるね」

あらり、はやて達とは別行動ですかい・・・

「なんやあ？ お母さんは寂しちやうやなあ？」

何をおっしゃるはやてさん

「リンがいるから大丈夫ですよ」

「いや、何故にそうなる」

「いつ俺はリインのフラグ立てた?いや、別に誰のもいらんが・・・」

はやてはそんな俺の様子を笑いながら、俺達とは違う方向に向かつて行つた。

失礼な奴だ！まつたくもう・・・

(キィイイン・・・パン)

「はーー！到着ですー！」

光が晴れると俺たちは自然に囲まれている場所にいた。

・・・・・

「ルルルが・・・」

「なのはせん達の故郷・・・」

「ルルだよ」

「ふふひ、 リラシードヒヨドとさぶて変わらないでしょ」

ん～・・・確かに・・

まだ機動六課の周辺しか知らないけど
あんまり変わらないかも・・・

「空は青いし、 太陽も一つだし・・・」

「山と水と自然の匂いも悉くつです」

「ああくねー」

フリードが嬉しそうに声をあげる・・・可愛くね？

「確かに気持ちいいなあ、この空気」

「そうだな、湖も綺麗だし」

「うん」

「というかここは具体的にどこでしよう。
何か湖畔のコテージって感じですが・・・」

「ああ、何か建物もあるもんな
めがつさお泊り系の・・・」

「現地の方のお持ちの別荘なんです。」

「捜査員待機所としての使用を快く許諾していただけたですよ」

「現地の方?」

「こっちにそんな人がいるのか?」

「ああ・・・あの人たちかも・・・」

「大地がホソリと咳く。」

「あれ? 大地は知ってるっぽい・・・」

「事は、一期と二期のキャラかな?」

「そう思つていると何か大きめの車がやつてきた。」

「自動車へ」ひちの世界にでもあるんだ・・・

ティアナ?とりあえず一度地球のイメージを俺と話し合わないか?
絶対口クなイメージしてないだろ?」・・・

「なのはー」フロイトー・

車からオレンジの短髪の女性が出てきて向かってくる。

ん?なのは達のお知り合い?

「アリサちゃん!」

「アリサ

「向ヒ、もヒ・・・」無沙汰だったじゃない

「あせせつ、ひめこ」めこ

「こりこりひへじへじ・・・

「あたしだってきじいわよ。大学生なんだから

「アリサさん、」さわさわです

「リイン、久しづつ~

「はいです~

なんだか?・・・色々こきなりすぎて付いていけない・・・

みんなもポケ～っとしてるし・・・

「あ、紹介するね」

フロイトがこいつを向き、

「私どなのは、はやての友達で幼馴染」

「アリサ・バニングスです。よろしく」

隣の短髪さんを紹介してくれた。

「え～、アリサ・バニングス・・・・・・・
かっこよくね？名前が！」

「「「「よろしくお願ひしますー」」」

「うふ、あ、そういうえばはやて達は？」

「別行動です。違う転送ポートから来るはずですの」

「多分、すずかのところへ」

「・・・・あの・・・・会話に入れない・・・・
いや、俺が男だから女同士の会話に入れないとかじゃなく
ただ単に入れん・・・
みんなも同じようこそわそわしていた。」

そんなこんなで任務開始～

ロストロギアの搜索地域は海鳴市全般、所々移動してゐるよつなので
スターズとライトニングは分かれて搜索

そして街の各所にサーチャーを設置、これが今回の任務らしい
地図を見せてもらつたけど・・・細かいのはティアナに任せよつと

「ほんなら、機動六課出張任務『ロストロギア探索』任務開始や～」

「「「「」」解ー」「」」

とりあえずガンバろ・・・

・・・夕方近くで任務しゅうりょ～う・・
疲れた・・・思い切り疲れた・・・
サーチャーって意外と重いんだなあ・・・つか俺荷物持ちだつたよ・
・ o r n

「そろそろ日も落ちてきましたし、晩御飯の時間ですねえ」

「晩御飯より俺は休みたい・・・

「だらしないわねえ」

「俺はバトスピばっかであんまり運動やらなんやらしてないのー」

「誇れる所じや無いよね、それ」

うわ～ん！スバルもティアナも俺を攻めるよ～
俺は頑張ったはずなのに～

「う～ん？でも手ぶらで帰るのもなにかな？」

何？誰かと念話したの？

まあ、任務中だから当たり前か・・・

そんな風に思つてはいるとなのはが携帯を持って
電話をする。

魔法使いが電話するってシユールな光景だ。

「あ、お母さん？なのはですか？」

「 「 「え？」 「」

え？なのはのお母さん？

いや、そりゃ人にはちやんと親はいるよな。
でも・・・

「なのは（わ）お母さん・・・」

「そ、それは存在して当然なんだナビ」

「じゃあ、十分くらいでお店に行くから、う～ん、それじゃあ

やつ言い、なのはは電話を切る。

「なのはって・・・親がいたんだ・・・」

そして俺は思つた事をそのまま喋つてしまつた。

「ん？ それはどうゆう事かな？」

言つた瞬間、なのはがにこにこしながら聞いてくる。

・・・にこにこするのは良いけど・・・目が笑つてない！

そして後ろの黒いオーラがテラ怖い！

「すんません！なんでも」やがこません！

「ん、よひじー」

「、怖かつた・・・（泣）

「あー、ちよつと寄り道しちゃあつか」

「はいです」

「あの、今お店つて・・・」

「もうだよ、家は喫茶店なの」

「『喫茶翠屋』、おしゃれでおこしこお店ですよ～

「ええ～」

二人は思つたとこでいいほど驚いた。

そして俺はとちりとちりと一二期と一期を見ときやよかつたと後悔していた。

ファイフステップ॥出張任務1（後書き）

大地「あれ？ 空は一期と二期見てないのか？」

作者「その方が楽しそうだから」

大地「何かテキトーだな・・・」

作者「ほとんどわからない」という設定もいいじゃないか
知らないキャラも大地が知つてたらいいや的な感じだ」

大地「どんだけテキトーなんだ」

作者「それが俺のポリシーだ。」

大地「とりあえず捨てて来い・・・はあ・・・」

作者「えっと、できればここは駄目だなとかこんな風にすればいい
いんじやね？」

と語う方は遠慮なく感想ください。」

大地「来るはずないって・・・」

作者「うるさいよー（泣）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8447s/>

魔法少女リリカルなのはStrikers バトスピと魔法の物語
2011年10月9日00時22分発行